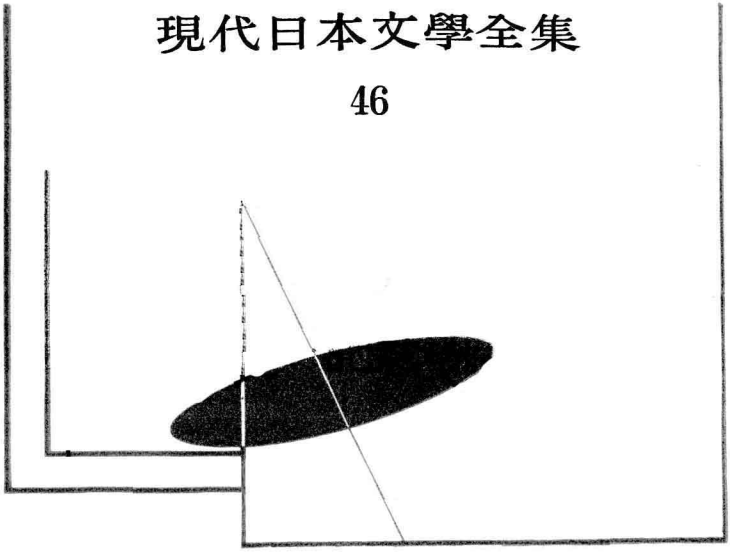
武田麟太郎
島木健作
高見順

集

現代日本文學全集

46



筑摩書房版

現代日本文學全集　46

武田麟太郎
島木健作
高見順集

昭和三十年四月十日　印刷
昭和三十年四月十五日　發行

著者　武田麟太郎
島木健作
高見順

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者　古田晁

東京都青梅市根ケ布三八五
印刷者　山田一雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所　筑摩書房
〔電話〕東京(二九局)七六五一(代表)
振替　東京　一六五七六八

整版　株式會社　精興社
印刷
製本　株式會社　高陽堂

黒猫……二五六
赤蛙……二六一

高見順集目次

故舊忘れ得べき……二六七
虚實……三五〇
ノーカナのこと……三六一
過程的……三六九
武田麟太郎論（臼井吉見）……三九一
島木健作（中村光夫）……四〇二
高見順（中島健藏）……四一二
解説……四一五
年譜……四二三

装幀　恩地孝四郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

武田麟太郎集

旺盛なる
散文精神を
希求す

昭和十二年　武田麟太郎

反逆の呂律

1

囚衣を脱ぐ。しかし、着るものがなかつた。連れて來られた時は木綿縞の袷だつた。八月の炎天の下をそれでは歩けないだらう。考へて襦袢一枚になつた。履きものには三錢の藁草履を買つた。

仙吉はかうして午前五時、S監獄の小門から出た。積なので振りかへらずに歩いて行つた。畠と畠との間の白い道がステーションまで續いてゐる。彼のうしろで次第に高いコンクリートの塀を持つた監獄が遠くなつた。

汽車に乘るまでには時間があつた。三ヶ月の服役の報酬としての四圓十錢のうちから、驛前で大福餅を食つた。昨夜のらしく、餡は饐えてゐた。だが彼は頰を盛に動かし、茶をのんでは、咽喉骨をゴクリゴクリとさせた。

汽車を下りてから、村まではなかなか遠い。夕方の燈が點く。稻の葉の香が際立つて鼻をついて來た。野良歸りには不思議に逢はなかつた。唐もろこしに圍まれた姪の家まで來た。背後の山はもう眞黑に暮れてゐた。

姪の家では緣側で彼の娘のウメ子が泣いてゐた。部屋の中の黃色い電燈を逆に受けて、ウメ子はミジメに見られた。ケチン坊の姪の扱ひ方が想はれた。仙吉はトツサに提げて來た袷を投げて、娘を片手で抱いた。びつくりして、もつと泣き出した。

夜更けるまで、姪夫婦と諍つた。姪は養育費を一圓五十錢よこせと、云つた。仙吉はアホコケと云つた。一ヶ月三十錢にしても、一圓もかかるまい、とどなつた。そして脂臭い一圓札を投げた。姪はそれを拾つて、いつも腹にくくりつけてある胴卷の中にしまひこんだ。

朝になれば如何しよう。仙吉にはもう耕す土地はなかつた。小屋もとりあげられた。村の旦那と爭ふものは、いつも、このやうな結果になるのだ。村に居られないものは、O市に出るよりしかたがなかつた。都會へは四方からいろんな人が集つて來る。そして、仙吉の考へに從へば「榮エウに暮せるのだ」何をコセコセした村でなんかくすぼつてることがあらうぞ。

朝になつた。仙吉は去年のまま洗つてないので、黃色くなつてゐる浴衣を着た。その上に、黑帶でウメ子を背負つた。

「一生、こんな村には歸つて來んぞ」

姪はかまどの煙の中から、どなり返した。

「さつさと失せろ！　顏見るのもイヤぢや」

駐在所では仙吉の歸つたのを知つてゐた。駐在所は地主の家に怒鳴りこんだ仙吉を取り押へる際に、彼のために、池ん中へ投げられた。そのしかへしは、彼を三ヶ月の間、S監獄に送つたのでは足りなかつた。村の若い連中をそそのかした。あんな旦那にタテつく社會主義の野郎は思ひ切りこらしめてやらにやならん。村の若い連中は仙吉を待ち伏せした。

池の側で仙吉は襲はれた。まだ朝の氣が池の上をはつてゐた。ウメ子は柿の木の下に投げおろされた。草の露で彼女は濡れた。幾度も若者たちは怒聲を發した。その度毎に仙吉の苦しさうな呻き聲がきかれた。池の水は多くの波紋を作つて搖れた。若者たちが去ると仙吉は柿の木の下に來た。浴衣からは水が滴り、眞青な頰からワナワナ震へる唇にかけて、小さい浮草が一面にくつついてゐた。裸體になり、娘の横に彼も倒れた。そして、親と子は列んで泣きだした。

2

この小さい文章の書き手である武田はウメ子から、以上の話をきかされた。しかし、それは彼女がやつと四歲の時だ。だから、以上は彼女が實見したのではないだらう。父の仙吉が醉つぱらつて、幾度も彼女に話したのが、はつきりとした形を彼女の頭の中に作つたのにちがひない。彼らはO市へ出て來た。そして、それから十五年も經つ。十五年と云ふ年月は貧乏人のところでは色んな事件を起させるに十分だ。しかし、くはしいことは貧乏人である讀者の想像に委せて、物語に必要な點だけを、書き拔かう。ウメ子の語つた通りに。

3

仙吉は色んな職業の中を轉がつた。最初、車夫をした。町の道すぢもはつきり知らなかつた頃だ。脚を悪くして稼いだ。すると、警察から親方のところへ來た。村で小作料のことで地主と爭つたことのために、彼は「社會主義者」の札をつけられてゐた。親方は曳き子の仙吉を逐ふ決心をした。その夜、仙吉はやつと遊廓へ行く客を得て走つた。冴えた霜夜であつた。二十錢を受取つて歸つた。遲い夕食として夜泣きうどんを食はうとすると、確かにどんぶりの中へ入れた金がなかつた。仙吉は二時すぎの橋の上から、暗い川水を眺め、暫くは動けなかつた。欄干には霜が白い。親方の二階に歸つて來、すでに寢てゐるウメ子の横に、空腹の仙吉は眠つた。明日出て行くことを宣言されるのも知らずに。

それから市の塵芥人夫になつて悪臭を頭に被つた。オイチニの藥賣りになつて手風琴をならして歩いた。歸つて來るとウメ子はそれを玩んだ。ブウブウと鳴るのだ。運河から荷を揚げて倉庫へ運ぶ人夫になつた。重い梱を肩にしてうつむき加減に搬んでゐる仙吉の眼の下に大きな手がその日の給料をのせてさし出された。驚いて梱を下し、肩あての布で汗をふきながら見ると、監督の男だ。仕事をやめて出て行けと云ふのである。ウメ子はまばらに草の生えてゐる川べりで、云ひわけをしてゐる父の姿を見てゐた。Sの歡樂場が計畫された。仙吉は土方になつた。秋の空の下をトロツコに土をのせて走る。請負人は「なに、前科者でも、主義者でもかまふもんか。そんなこと氣にせいで働け、働け。悪いやうにはせん」と云つた。しかし、S歡樂場の建設は中止になり、請負人は使用人に賃銀を拂はずに逃亡した。ウメ子は七歳になり、學校へ行かねばならなかつた。

いつも仙吉には肩書きがついて廻つた。何故か主義者なのである。人民保護の巡査を毆つて前科一犯であつた。すると、次第に彼も兇暴になつて來た。齒には齒を以て酬いよ。待遇されるところを以て返禮しようと彼は考へ出した。少し金がはひると酒をのんだ。のまずにすませないのだ。そして地主と警察をののしつた。貧乏な生活からして金持の悪口を云はずにはをられなかつた。だが、そんな時の、マジメに聞いてゐる相手はいつもウメ子ひとりだ。小さい彼女はダマツて父の前に坐つてゐた。

小學校に通ひだした、ある秋の日、ウメ子は朝、出るとすぐ歸つて來た。その頃、仙吉はペンキ屋に雇はれてゐた。彼は百姓生れにも似ず筆蹟がよかつた。それが役に立つたのだ。ウメ子の姿を認めると大きな看板文字を書いてゐた仙吉は梯子の上からどなつた。「どうした、もう學校しもたのか」すると、ウメ子は說明した。平常通り學校へ出ると先生に叱られた。袴をはいて來なかつたと云ふので。今日は天長節であつた。「先生は不忠者や云ひはつてん」仙吉は梯子の上から下りて來た。「何ぬかす。これから行つてその先生に云うてやる。貧乏人に不忠者も糞もあるものか。袴やええ着物がいるのやつたら買うて寄こせ云うたる」そしてさう云つた。結果は失業であつた。ウメ子は學校から極端にいぢめられた。

二年生になる頃から、同居してゐるお神さんに教へられて、風船を作ることになつた。赤、紫、黄、青、白、五色の花瓣のやうな紙片をチヤブ臺の上にのせた。毎日糊をこしらへてそれを作つた。そして夜になると、お神さんのこしらへたのと一緒に紺の風呂敷に包んで坂を越えて遠い道を歩き、問屋町の風船屋へ持つて行つた。しかし、八つや九つの女の子は風船を作るより、それで遊んでゐるのが普通である。

それからセルロイド櫛の飾り附けもやつた。これはアラビヤ糊と云ふ西洋の糊を使つた。小さい金具の飾りを「ピンセット」で挾むのだ。この方がダメになると袋の紐附けをやつた。仙吉が失職すると、彼もこのあまり金にならない仕事をしてゐる少女の手傳ひをした。

4

少し手間どつて來た。簡單に書かう。こんな狀態のラレツは讀者には餘り興味あるものではないから。とにかく以上のやうな父親とその生活の感化のもとに彼女は次第に反逆の呂律をおぼえたのだ。このロレツがしつかりとした言葉になつたのは、彼女が燐寸工場の女工になつて

からであつたが。

5

齒ブラシにする牛の骨を柔かくするために、潰けた桶が幾つも並んでゐる。牛骨は黄色くて、臭い。仙吉はそこで働きだした。荒削部だ。白いザラザラの粉を頭から肩にかぶつた。新聞に勞働爭議の記事が多くのつた年だつた。職人（仙吉は勞働者のことをかう云つた）たちは毎日熱心にこの記事を讀んだ。ひる休みにもそのことばかりが話の種になつた。「日給を二十錢あげい云うて、E鑄物工場がストライキやつとる。うちもどうしても二十錢や三十錢はあげて貰はんならんやないか」有志のものは寄りあつて、同じ境遇である他の工場の勞働者のストライキがどうして起るのかを研究しはじめた結果、この工場でもストライキにはひることになつた。「表門だけでなく、裏門をこしらへろ。多くの勞働者はムダな廻り道をしなければならぬから」と云ふ要求まで出された。最初は怠業から始めた。そして、勞働組合友愛會の支部に應援を求めた。「主義者」の仙吉には初めての經驗のストライキであつた。彼は勇敢に戰つた。爭議は永かつた。幾度も彼はひつぱられた。それでも彼は「敵打ち」のつもりで、皆の先頭に立つてひるまなかつた。要求の大半は通り、解決した。

仙吉は工場分會長になつた。彼は子供のやうに得意になつた。それから比較的落ちついた生活が續く。ガラス問屋と下駄屋との間の露路に平家を一軒借りた。そして、ウメ子も燐寸工場に働くまでに成長した。スパイはつねに出入りしだした。しかし、今は仙吉に少しばかりの畏敬の念を持つてゐるやうに見られた。彼らは小娘のウメ子にふざけたり、彼と冗談を云つたりした。

6

日本の勞働運動は次第に自然發生的なものから意識的なものへと移つて行つた。今までの運動は建て直された。指導者は色々とムツカシイ問題について考へねばならないのだ。一回のストライキ以來、平穩に存續して來たMハブラシ工場の組合分會の中にも、仙吉に云はせると、小ムツカシイ理窟を云ふ若いやつが出て來た。仙吉には「かなはん」ことであつた。だが「あのストライキの時の俺を忘れて貰つては困る」と彼は云つた。若い連中はこの先輩にも別に遠慮しなかつた。俺は引退しよう。そして彼は平の組合員になつた。何だか、彼には精確な理論によつて動いたり、規律を守つて行くのが窮屈に思はれたのだ。もつと、お祭り騒ぎのやうに反抗したかつたのだ。

7

汚い溝川が流れてゐる。小さい木橋がその間に架つてゐた。東側に古い警察署があつた。川を越えて、丁度その向ひ側に、代書屋が四五軒並んでゐた。そのうちに、しもた屋の店さきを借りて、仙吉は坐つてゐる。彼もいつの間にか代書人になつてゐるのだ。へんに心易くなつたスパイにでも便宜を計つて貰つたにちがひない。筆蹟のいい彼は、客を待つて、屆書や證書類の代書をやつてゐた。夕方までそこにゐて、それから、ガラス屑屋と下駄屋との間の家へ歸つて行つた。時々、家の中は電燈もついてゐなく、夕飯もできてゐなかつた。燐寸工場に出てゐるウメ子は娘らしくなく、退け時が來ても歸つて來ぬことがあつたのだ。今でも定期的にたづねて來る藤本といふスパイは、代書店にゐる仙吉のところへ來て、四方山話をした後、

「おウメちやんにも氣をつけた方がええぜ。蟲がつくかも分らへんからな」と云つた。

蟲？　ウメ子のところへはよく會社の若い男が遊びに來た。仙吉は彼を相手に「主義者」としてのかつての自分を愉快にはなすことが度々あつた。「今の若いやつの運動見てられへん。危かしうて」と云つた。さう云ふ風に語つたり毎日々々が安穩に暮せると、若い連中の組織的な力に嫌惡の念さへ湧いて來るのだ。これは不思議な現象であつた。——あの遊びに來る若い男が蟲なのであらうか。——彼は考へる。

ちやうどそんな時に煉瓦塀にもたれて、その蟲である若い男がウメ子が工場から出て來るのを待つてゐた。彼らは色々と話すことがあつた。燐寸會社の古い頽れた煉瓦塀に沿ひながら、彼らは歩いて行つた。まだ寒い頃だ。風が吹いて、

ウメ子の黒い肩掛がヒラヒラした。話のとぎれた時、突然、ウメ子は云つた。

「これ逢ひ引き云ふもんちがふ？　わてら何やら活動にあるやうな戀人どうし見たいなわ」

それから二人は若々しく笑ひだした。その夜、晩く、彼女は歸つて來た。頰ぺたと右肩に糊が冷たさうに、硬ばつてくつついてゐた。手をもむとボリボリと糊が垢と一しよに黑くなつてこぼれた。

――ポスターを張りに行つた二人であつた。議會解散要求のポスターは風がきついので張りにくかつた。糊はいくども吹き離された。若者は外套をひろげて風を防いだ。小さいウメ子はポスターと一しよに、それに包まれた。

「ほんまに、わてら戀人どうし見たいなわ。戀てきつとこんなものやろな」と云つた。

8

夏近く、父親はことごとに娘にあたつた。彼はあのストライキの思ひ出だけに生きてゐた。遊びに來る若者が、ウメ子を惡い方に誘惑してゐるやうな氣がしてならなかつた。惡い方――あの最近の勞働運動のやり方を意味してゐた。をかしい程、反動し、老いが表情に現れ出した仙吉の顏を、彼女はヂツと見た。

「そんなことあれしまへん。あれしまへん」

打消さねば、川一つのあちらからよく訪ねて來る藤本にどんなことを父が云ふか、分らない。ウメ子はそんな心づかひをしなければならないのが情なかつた。反逆の呂律の手ほどきをしてくれたのはこの父ではなかつたか。その頃まかれた種は芽生えようとしてゐる。燐寸工場で刷板部の勇敢な女工の組織を彼女が中心になつて始めてゐたのだ。

暮れ方の色が濃くなつて來た。溝川はブツブツと泡立ち、空はドンヨリと曇つてゐた。仙吉が店をしまつて歸らうとすると依賴人が來た。建築の屆書を書いてやり、一枚九錢の要求をした。依賴人はのんきにも判を忘れてゐた。彼は慌てて取りに行つた。仙吉は店じまひをし歸るしたくをした。机の上に白い屆書をのせてボンヤリと依賴人の歸つて來るのを待つてゐた。軒に蚊がうなつてゐる。その時、川向うの南の方から小柄な女が背廣二人にひきずられるやうにやつて來た。無感覺に眺めてゐた仙吉の眼は突然ギラとして、腰をあげた。不思議な光景であつた。ウメ子がスパイに捕まつて！　彼女は川一つ越して、父の立姿を認めた。そして一つおじぎをし、警察の中に消えた。彼はキヨトンとして了つた。彼の本心は娘は無キズ者にして置きたかつたのだ。だが、蟲がついた。蟲が――

「お賴みします。お賴みします」

その時、歸つて來た依賴人は彼のうしろから判をさし出しながら幾度も繰りかへして云つた。

（一九二九年九月十九日、朝。）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

日本三文オペラ

白い雲。ぽつかり廣告輕氣球が二つ三つ空中に浮いてゐる。――東京の高層な石造建築の角度のうちに見られて、これらが陽の工合でキラキラと銀鼠色に光つてゐる有樣は、近代的な都市風景だと人は云つてゐる。よろしい。我々はその「天勝大奇術」又は「何々カフエー何日開店」とならべられた四角い赤や青の廣告文字をたどつて下りて行かう。歩いてゐる人々には見えないが、その下には一本の綱が垂れさがつてゐて、風に大樣に搖れてゐる。これが我々を導いてくれるだらう。すると、我々は思ひがけない――もちろん、廣告輕氣球がどこから昇つてゐるかなぞと考へて見たりする暇は誰にもないが――それでも、ハイカラな球とは似つかない、汚い雨ざらしの物干臺に到着する。

淺草公園の裏口、田原町の交番の前を西へ折れて少しばかり行くと、廢寺になつたまま、空地として取殘された場所がある。數多くの墓石は倒れて土に埋まつてゐ、その間に青い雜草がのぞいてゐるのが、古い卒塔婆を利用して作つた垣の隙間から見られる。さらに眼を轉じると、この荒れた墓地に向つてひどく傾斜した三階建の家屋に氣がつくだらう。――輕氣球の繫がれてゐるのは、この三階の物干臺で、朝と夕方には、縞銘仙の筒つぽの着物を着たここの主人が蒼白い顏を現して操作を行ふ。即ち、彼は、萎んだ輕氣球が水素ガスを吹込まれると滿足げに脹れあがつて、大きな影を落しながら、ゆるゆると昇つて行くのを眺めたり、太綱を卷いて引くと屋根一ぱいにひつかかりさうになつて下りて來るのを、たぐり寄せたりするのである。

云ふまでもなく、これがこの四十すぎの男の本職ではない。東京空中宣傳會社から、こちらの地域の代理人として幾ばくかの手當は受取り、それも彼の重要な收入になつてゐるのだらうが、表向の商賣は別にあるし、その他多くの副業も營んでゐるのである。――

墓地から我々の見た彼の三階建の家は裏側に當つてゐるので、表の方へ廻つて彼の店を見ならば、彼が日に二合づつの牛乳を呑むに拘らず、乾燥した皮膚をして、兎のやうに赤い眼の玉をキョロキョロさせ、身體中から垢の臭を發散させてゐる理由も、何だか了解できるやうな氣がするだらう。それ程、彼の店は陰氣で埃つぽく不衞生である。動いたことのない古物が――鍋釜、麥稈帽子、靴、琴、鏡、ボンボン時計、火鉢、玩具、ソロバン、弓、油繪、雜誌その他が古ぼけて、黃色く脂じみて、黴に腐つてゐる。唯、これらの雜然とした道具と道具との狹い間を生き生きと動いてゐるのは、主人の子供たちだけである。――細君はやはり赤茶けた榮養の惡い髮の毛を束ね、雀斑だらけの疲勞した表情をしてゐるが、恐しく多產で年子に困つてゐる。かつて、あるテキヤに口說かれたことがあつたが、そして、もう少しのところで誘惑されて了ふところであつたが、彼女は思ひとどまつて次のやうに言譯をした程である。――自分は關係するとテキメンに子供を產む性質だから、後になつてこのことが露顯するかもしれない、その時には足腰の立たぬ位ぶん撲られて追ひ出され、食べ物にも困り、しかし、あなたは浮氣な色事師だから世話なんぞ見てはくれまい、そんな結果を思ふとどうしてもできない、と斷つたのであつた。

――主人は他に周旋業、日步貸等もやつてゐる。この後者のために、新聞の朝刊三行案內欄に「手輕金融　あづま商會」の廣告を出してゐるが、これは貸出の回收不能なんかで手間取るよりもと、簡單に「調査料」詐取の方法を採つてゐる。即ち申込者から、普通一圓、市外二圓の割で、信用擔保等の調査料を取立てるのであつて、その調査の結果は、御融通できないと云ふことになるのである。それは貸さない口實を見つけ出すための調査料のやうな觀を呈してゐる。――たとへば、擔保の有無、保證人の信用工合、細君が入籍してあるか、子供があるかなぞの中にその口實は幾らでもころがつてゐたし、條件が揃つてゐても、現住所にどれ程ゐますかとの問ひに、哀れな申込者が六ケ月と答へれば、

商會では一年以上同一場所に居住してゐる人でないと貸出さないと云ひ、よしんば一年以上であつても、いや二ケ年以下の御家庭は困るのですと——何とでも理由はつけて、調査料を捲きあげ得られるのである。

以上の二つの副業が、この主人の全體としては陰鬱な表情のうちで、眼だけを生き生きとしたものにしてゐる。赤い瞳であるが、これを上眼使ひにしよつちゆう動かす時に、白眼がチラチラと冷く光るのである。調査に出かける場合にはどんな遠いところでも自轉車に乘つて行き、脂じみた朴齒の下駄で鈍重に動作し、ぼつりぼつりとものの云つて口數も少い。ところが、家に歸つて來ると、實にキビキビとして、一階から三階の間を馳け廻り、部屋々々の樣子をうかがつて、逢ふ人ごとに如才なく辯舌を振ふのである。——これは、彼のもう一つの副業がしからしめてゐるのであつて、すでに想像できるやうに、彼の三階建の家屋はアパートとして經營されてゐるのである。

三階は、細君がお神樂三階は緣起が悪いと反對したのを押切つて、あとから建て增されたものだ。このことは主人の金の貯つて來たのを語ると共に、我々が墓地側から望む時、この家が傾いてゐるやうに見え、また、土の焜爐や瀬戸引の洗面器、時には枯れた鉢植の置かれてある部屋々々の窓が規則正しく配列されてなくて、大小三つある物干臺と一しよに雜然と亂暴に積み重ねたやうな印象を與へられる原因をなしてゐる。

アパートと云つても——いや、そんな何となく小綺麗で、設備のよくととのつた西洋くさい貸部屋を意味する言葉を使つてはいけないだらう。何故かと云へば、卒塔婆の破れ垣の横を通つてその入口に達すると「あづまアパート」と書いた木札がかかつてゐて、ちやんと、アパートではないとことわつてゐる。

そこで、このアパートが普通の下宿屋乃至木賃宿とそんなにちがつたものでないと云つても、あやしむことなく理解されるだらう。それでも、下の入口の下駄箱の側にはスリッパが——アパートの主人はこれをスレッパと呼んでゐる——亂雜にぬぎすてられてあるし、廊下の兩側の部屋には、褐色のワニス塗りのドアがついてゐ、中からも外からも鍵がかけられるやうになつてゐて、幾分西洋くさいアパートに近つかうとはしてゐる。けれども一旦部屋にはひると、部屋の境目がどう云ふわけか、襖やガラス障子でくぎられてゐるので——もちろん、これらは釘で打ちつけられてあけ閉てできぬやうにはしてあるが、お互ひの生活は半ば丸出しと云つてよいのである。疊も壁も、それから乾からびてしよつちゆう割れる音のしてゐる柱も、人間の色んな液汁が染みこんでゐて汚く悪臭を發散してゐる。表通に自動車が警笛をならして走るたびに部屋の振動するのは云ふまでもなく、べとべとしてゐて足裏に埃のいやにくつつく廊下や階段を誰かが歩いただけで、部屋全體が響けるのである。

油蟲の多い炊事場は、二階階段の上り端に、便所と隣りあつてあるが、流しもとは狹くて水道栓は一つ、ガス焜爐は二つしかないので、支度時には混雜して、立つて空くのを待つてゐなければならない。

こんな不潔で不便でも、貸賃が安く、交通に都合がよいので、大抵の部屋はふさがつてゐるやうだ。六疊が十圓で、ガス、水道、電燈料が一圓五十錢——合計十一圓五十錢の前家賃になつてゐる。多くは淺草公園に職を持つてゐるのであるが、彼らの借室人としての性質はどんなものであるか。

彼らはその家賃が部屋の設備からして高いと考へてゐる。できれば値下すべきであり、殊に最近の不景氣で以前と同じ金を取るのはひどいと考へる。そして、そのことは一人一人で交渉するよりも、全體としてアパートの主人に談合すべきであると考へる。——ある夜、多くの者たちは十二時すぎまで仕事があるので、一時頃から三時前までもかかつて、協議して一圓の値下を要求することに決めた。そして翌日は晦日になつてゐるのだが、誰も拂はずに、交渉を引受けた小肥りの映畫說明者の返答を待つことになつた。ところが、翌朝早く、主人は部屋々々を起して廻つて部屋代を取立てた。誰か昨夜のことを彼に告げたものがあつたのだらうが、皆も申合せを忘れたやうに、主人の劍幕に恐れをなして拂ふのであつた。そのくせ、お互ひには

そんなことをしたとは顏色にも出さず、知らぬ顏でゐた。――朝寢坊の說明者は次から次へとひつきりなしに電話に呼出されるので出て見ると、決定を裏切つたものたちが、實は昨夜あの仲間にはひると云つたが、あの時はすでに家賃は拂つてあつたんで、と云つた風な見え透いた言譯を出先きからするのであつた。そこで說明者も獨りでは力もないし、主人に憎まれても仕方がないと、彼も亦、定額を支拂つたのである。

――そんな彼らであるので、共同生活の訓練は少しもない。掃除番が順次に廻つてくるのであるが、炊事場でも、それから夏を除いては隔日に立てられる風呂でも、出來るだけ汚くしようとしてゐるやうにさへ見える。野菜の切れはしや、魚の骨や塵芥はそこいらにちらばつてゐるし、風呂なんかは二三人はひると、白い垢や石鹼の糟が皮膚にくつつく程浮いて小便臭くなつて了ふ。他の部屋に要事があつて入る時も、ノックなしにドアを突然あけるし、鍵のこはれてゐる便所なぞも平氣で扉を押し開いて、先に入つてうづくまつてゐるものを狼狽させたりする。

そのうちでも、最もうるさいのは、暇のある女たちだらう。その中心には、吉原遊廓の牛太郎の女房が二人ゐて、彼女たちは晝は亭主がゐるので部屋に閉ぢこもつてゐるが、夜はお互ひの部屋を菓子鉢を提げて行き來し、女たちを集めて晩くまで噂ばなしに時をすごすのである。部屋の前には女のスリッパや草履が重なりあつて、彼女たちの高い笑ひ聲はどこの部屋にあつても聞くことができる。

最近の彼女たちの話題は、六十すぎの爺さんと婆さんとの戀愛はどんな風に行はれ得るかと云ふことであるらしい。――その婆さんはずつと以前から、三階の一號室に住んでゐるが、そこへ近頃同年配の老人が亭主として入つて來たのである。彼はよほど遠慮深い性質で、婆さんのところへ婿入りしたと云ふことが強く頭にあると見えて、いつも歸つて來る時には「今日は」とか「今晩は」とか云つてから部屋にはひる。すると婆さんはやさしい聲で、

「何ですか、自分の家へもどつてくるのに、今晩は、と云ふ人がどこの世界にありますか。唯今、とか、今歸つたよとかおつしやい」と叱つてゐるのが、部屋の外まで洩れてくる。それに對して爺さんは、

「うん」と幸福さうに答へて、女の子のために土產に買つて來た食べ物なり、遊び道具をそこへ置くのである。――七つになつてこの四月から小學校にあがつてゐるその子供は、婆さんの妹の私生兒で、養育を託されてゐるのである。

それでも次の日はやつぱり爺さんは、

「今晩は」とそつと部屋に入つて來、婆さんは同じ苦情を繰りかへす。隨分永い間、この對話は二人の間に飽かず續けられてゐるのが、女たちの噂ばなしで笑ひの種になつてゐるが、何もをかしがることはないのである。

彼らは義太夫の寄席で知合になつた。婆さんはそこで仲賣の女として働いてゐるので、爺さんは竹本駒若と云ふ義太夫語りが好きで毎晩聽きに出かけてゐるうち、お互ひに馴染みあつて了つた。

そこで、爺さんはそれまでゐた息子の家を中學生のやうな昂奮と決心とで、少しばかりの小遣錢を持つて、飛出して婆さんのところへやつて來たわけである。

息子の家にゐるのが彼の苦痛であつたのは、何も息子夫婦が彼を虐待したからでもなく、物質的に苦勞させたからでもない。それどころか、彼らは老人をいたはり、豐富に着せ、食はせてゐた。何故ならば、息子は仲買人であつて長距離のも含めて電話を三本も持つてゐるやうな物持であつたからだ。だけれど、爺さんには何か物足りないものがあつた。嫁は亭主の父親としてつくしてくれるだけではないか。それにはむしろ利己的なものがある。息子は仕事にかまけて、金に追はれてゐる。老人が生活のうちに欲しいものは誰も考へてくれず、與へてもくれない。それは愛情であつた。

その親身な愛情を彼は今、最近の知合の他人のうちに見つけ出してゐる。彼はその中に浸り、氣持の結ぼれを揉みほぐしてゐる。

婆さんも彼を得たことを悅んでゐる。そこで、つらいことではあらうが、爺さんがあんなにも好きな義太夫の寄席へも、ひよつとして息子の家から探しに來ないものでもないと、斷然行くことを禁じて了つた。そして、日本物の活動寫

眞か、布ぎれ一枚だけが舞臺裝置である安歌舞伎を見ることを彼にすすめるのであるが、爺さんも、そのことをもつともと思つて、子供の遊び友だちになつてやつたり、それが寢て了ふと、公園をぶらりと歩いて日本酒を一本だけ飲んで歸ると云ふ風である。そして、横びんからつづいて銀色のヒゲのはえてゐる顏を、首すぢまでも眞赤にして、今晩は、とおとなしく部屋に入つて來るのである。

女の子が學校へ行くやうになつてから、朝早く起きる必要があるので、彼は考へて眠ざまし時計を買つて來た。それは、指定の時刻が來ると、「煙も見えず雲もなく」をうたひ出す小型のものである。——それを、七時のところに眠ざましの針を廻してゐると、茶を入れてのんでゐた婆さんは云ふのであつた。

その言葉は若い女が情夫に對して云ふやうな意味合のもので、どんなことがあつても、自分たちから離れないでくれ、しかし、息子さんは探偵を使つて私たちのところにあなたがゐることを嗅ぎつけることができるかも知れぬ、それが私は心配だ、と云つたのである。

「家から迎へに來ても歸らない？　爺さん、本當に歸つちやダメですよ」と、艶のある聲で云つたのである。

すると、爺さんは、自分が今どんなに居心地よくゐるかと云ふことを語つて、決して歸宅はしない、死水はこちらでとつて貰ふ決心でゐると云つてきかせた。そして、近頃は新聞を見ても廣告欄には全然眼を觸れないやうに努めてゐる。何故かと云へば、そこに「父居所を知らせ」とかその他の巧い文句で彼を探す廣告が出てゐたら、魔がさして、こちらを離れて了はないものでもないからである、と附加へるのであつた。

これらの對話は、聞耳を立ててゐたヒステリーの牛太郎の女房が、次の爺さんの述懐と婆さんの同情と共に、みんなに披露して、哄笑したのであるが、何もをかしがることはないのである。

婆さんは爺さんの今までの女との交渉なぞを質問したりした。爺さんは淡泊に答へて、三十の時に女房に死別れてからは、餘り接觸がないと云つて、婆さんを安心させた。その女房は「早發性何とか云ふ氣違ひになつてね、狂ひ死しましたがね。醫者はあまり氣苦勞がすぎたからだと云つてたが。——當時、わたしたちの貧乏は隨分はげしかつたので、貧乏があいつを殺したんでせう、きつと」

この言葉が終るか終らぬうちに、爺さんは驚かされて了つた。隣りの部屋できいてゐた牛太郎の女房も驚いた、と云つた。それは、突然、婆さんが泣き出したからであつた。婆さんは泣きながら云つた。

「わかりますよ、わかりますよ」それから嗚咽で聲を震はせて——「貧乏がすぎて氣が狂つて、それで若死して——お神さんの氣持も、その時のあなたの氣持も、わたしにはよく分りますよ」

それから二人とも黙つて了つた。爺さんは階下にわざわざ下りて行くのが大變なので、蒲團の裾の方に尿瓶が置いてあるが、そこで小便をした。それから、褐色の斑點の出來てゐる太い腕を拱いて横になつたが、——そのまま、永い間眠れなかつた。

爺さんは眠ざといので、いつも六時前にはさめるのであつた。だから、本當を云へば、眠ざまし時計なぞは要らないのである。しかし、彼は窓際から射して來る白々とした朝の光のうちに、枕もとの時計の針が廻つて七時になるのを待つてゐた。もう追つけうたひ出すぞ、と考へてゐると、チクタクの音を消して、突然、時計は陽氣に「煙も見えず、雲もなく」と音樂を奏しはじめた。爺さんは安心したやうな表情で、横に枕を外して寢てゐる女の子を搖り動かした。

「さテ、チイ坊や、時計がうたつてるから起きるんだよ、チイ坊、お起きよ、學校だよ」と、朝で痰がのどにたまつてゐるので、皺嗄れた聲を出して、彼は云つた。

ちやうど、この時刻に隣り部屋の女房は寢つく習慣なのであるが、毎朝、眠ざまし時計に眠りを妨げられることになつて了つた。もちろん、今までにだつて、彼女の晝寢をかき亂すものがあつたのである。それは四號室の蓄音器である。

そこにはカフェーの女給が情夫と一しよに住んでゐるのだが、男はしよつちゆう家をあけて他處に寢泊りしてゐる。それは他に女をこしらへるからである。

女は店に出る前にきつと數枚のレコードをかけてきく。よほどの音樂好きと見えるが、それもゆつくり聽き樂しむと云ふ風には見えない。一枚を半分ばかりでよすと、次には騷々しいのをかけて見、それも途中でよして、他のとかへると云つた有樣である。彼女はいらいらするので音樂を聽き、そのために一層いらいらし出すやうである。だから、暇のある女房たちが――ほら、ヒスがはじまつたよ、と云ふのも當つてゐないこともない。

男は呉服物のせり賣りの櫻をやつてゐる。色事師で――ニキビが少し眼立つが、色白の好い男である。アパートの主人の細君に云ひ寄つたのはこの男だ。あの場合は、奇妙な理由から失敗したが、そんなことは今までに殆どなかつたと云つてよい。しかし、如何して女と云ふものはこんなに脆いかと云ふことを知ることは人生の上で大きな損をしたことだと彼は考へてゐる。そして、このことは彼を憂鬱にするが、惰勢として女漁りに耽るより仕方がない。だから、彼の場合は、女に選び好みの感情は失はれてゐる。どの女も一樣に見えるとすれば、勢ひさうなるではないか。――この人生の損は、益々彼にあつて、擴がつて行くものと見られる。何故ならば、女は定評のある色魔に對しては、一種の親愛な情を持つし、好んで接近して來るからである。それは、主として快樂が一切無責任だと豫め分つてゐることと、女同士の競爭意識が掻き立てられるに拘らず容易にその男が獲得できると云ふ安心からであらう。――

このことは、アパートの暇のある女房たちの間にも起つてゐる。彼女たちは彼に誘惑されることを待ち、しかし、口では、アパート一番の好い男であるが、誰でも構はず關係するなんて嫌なこつた、それが玉に瑕だなぞと云つてゐる。

そして、四號室の女給を嫉妬するわけだが、それは全然意識しないで、彼女の惡口を盛んに云ふのである。女給の女房れんに評判の惡い原因は主としてこの點にある。

――かうした人生の損をしてゐる彼はもう一つ悲劇を背負つてゐる。それは、彼が女給である情婦を心から愛して了つたことである。女を全體として信用できない男が、一人の女を愛するとは！

彼は他の女との交渉中に、烈しく情婦の女給に對して嫉妬を感じることがある。この脆い女と同性である情婦も亦、このやうな姿態を他の男に示すのではないか、と云ふ考へが突然彼を苦しめるのである。自分の好色漢的な行爲が却つて、嫉妬をひき起す動因になるなぞは救はれないことだ。

更にこの悲劇が單なる悲劇として終つてゐるのであるが、それはこの顚倒した嫉妬に當るだけの行爲が、情婦に少しもないことである。彼が接した數千の女性のうちで最も物堅いのが自分の情婦であつたことは、彼を救はないばかりか、益々疑ひ心の迷路に彼をひきずりこんでゐる。

かつて、暴力團狩のあつた時、彼の仲間も擧げられたのであるが、彼はその男の情婦で四號室の女と同じカフェーに働いてゐるのに電話をかけて呼びよせた。女は少しく自棄氣味なところもあつて、泥醉して彼の誘惑に辷りこんで來た。彼は深夜、この女を見るのに堪へられなくなつて、あづまアパートに歸つて來た。彼は情婦が外泊してゐるか何かの裏切行爲があるかと、恐れながら、實は期待してゐたが、女は四號室に平穩に眠つて居り、彼を見ると寢場所を作つてくれるのであつた。――彼は張りつめて來た氣持が折れると、自分に腹が立つて來て、急に女に對して怒り出した。そして、手前は、俺がサツへあげられたりなんぞしたら、安心して浮氣しやがるだらう、と罵り言葉を繰りかへして撲るのであつた。撲りながら、自分が情なくなつたのも事實であるが、このやうな彼の倒錯した氣持は、この後もずつと續いてゐる。

最近のこと、彼はバクチ場で負けたので、情婦を抵當として、彼女に氣を寄せてゐる某に金を借りたことがある。その時は、すぐ回收し得たので何の變化も二人の關係に起らなかつたわけだが、彼は徹夜のバクチから歸ると、また例の癖が出て、手前は某に好意を持つてるんだらう、さうにちがひない、さうでなければ、やつがあんなに手前を抵當に金を貸すはずがないんだと難じはじめ、遂には流血の騷ぎを起しかねない始末であつた。

そして、これらの憂鬱を流し込むところは彼

には結局女色より他になく、彼の放埒な日々の行爲はやはり續けられてゐるのである。四月になつてから、金澤の博覽會にテキヤの一行と稼ぎに行つてゐるが、毎日のやうに情婦のところへ手紙を送つて來る。それは半ば脅迫じみた文句に充たされてゐて、その地方で浪費されてゐるにちがひない彼の愛慾の顚倒した姿を映し出してゐる。——

そして、このことを十分に知つてゐる四號室の情婦は、焦躁に驅られた表情で、店に出る支度をすると、あれやこれやのレコードを手あたり次第にかけてゐる。彼女の音樂好きは益々嵩じて來た樣子であるが、云ふまでもなく、彼女自身はその理由をつきとめてはゐないのである。

この呉服物せり賣りの櫻である色男に反して、一人の女のために——それも生れてはじめて知つた女のために背負投を食はされ、すつかり鬱ぎ込んで、女嫌ひになつて了つたコックが二階の便所の横、七號室にゐる。

見るから氣の弱さうな顏つきで、眼は近眼鏡のために神經質に瞬いてゐる。彼の部屋から外出するためには炊事場の前を通らねばならないが、そこに女房れんが塊つてゐる時なぞは、少しうつむき加減に眼を伏せて、人に眺められるのを恐れるやうに、そそくさと出て行く。——暇のある女房たちも奇妙に彼を問題にしない。その白い料理服を着た猫背のうしろ姿をちらと見送る時は、律儀な男だ、もう郵便貯金が隨分できたことだらうとか、何て風采のあがらない男だらうとか云つた短い感想が彼女たちの頭をかすめるだけである。獨身のくせに、男として少しも話の種にならなかつたのを見ると、所謂性的魅力と云ふものに缺けてゐるのだらう。

だから、淺草公園の安酒場の司厨場で働いてゐながら、女とのいざこざが少しもなかつたのである。誰も相手にしない萎びた男——この男のところへ、性の悪い女ではあるが、事件屋と一しよに呶鳴り込んで來ると云ふやうな出來ごとがあつたので、少からず驚いて、アパートの人たちは珍しげに、眼を見はるのであつた。

——三十すぎまで、女を知らずにゐた彼の永い間の平穩な生活。毎月八日は、彼の勤め先である安酒場——お銚子一本通しものつき十錢、鍋物十錢の、實に喧騷を極めた——女たちの客を呼び込む聲、泥醉した客たちの議論、演說、浪花節、からかひと嬌聲、酒のこぼれ流れてゐる長い木の食卓、奥の料理場から、何々上り！と知らせる聲なぞの雜然とした——安酒場の給料日であるが——夜更けて、四邊は靜かになり、料理場の電燈も消されて、仲間のものが打ち揃つて風呂に行き、それから遊びに出かける時、彼だけは一人になつて、夜更けの公園を出て、アパートにもどつて來るのである。給料の三十圓はそこで、鉛筆を握つた彼の前に色々と分割される。彼は諸支拂の合計を新聞に入つて來た呉服屋大賣出しの廣告紙の裏に記して見る。殘りのうちから、一ケ月の小遣錢幾ら、貯金幾らと豫定を作る。そして、この豫定は決して破らうとはしなかつた。だから、何かのことがあつて、早く使ひ果して了つた場合は、殘りの日數中、煙草錢もなしで、すごすのが常である。

郵便貯金の通帳の記入高はもう二百圓を越えてゐたのである。いつか、身をかためて獨立する場合には、これが必要になつて來る、それまでに、せめて五百圓にしたいと念願して、どんなことがあつても、これだけは手をつけまいと決めてゐたのである。

皆はこの堅い男を變人だと呼んで特別扱ひをしてゐて、それは彼を益々孤獨にし、人づきあひを下手にさせて行くのに役に立つたのであるが——彼とても、氣のあつた相手があれば大いに談ずるだけの熱情は持つてゐる。かつて一人の板場が病氣になつたので、助に來た若い男があつたが、お互ひに久保田万太郎の愛讀者であることを發見して、二人して大いに彼の藝術を論じたことがある。彼は自分がなかなか饒舌であることを知つて驚いた程であつた。そして、知らず識らずに昂奮して來、聲も上づつて眼がしらにも涙をためて、如何に料理すると云ふことも藝術であるか、これを客に提出するための配合を考へるのも藝術的な悅びを味はさせるものかと力說したのである。そして、相手の遠慮するにも拘らず、ビールをおごらねば氣がすまなかつた。彼自身は一滴も口にせず、飲めよとすすめるのであつた。

しかし、自分も時にはそのやうに快く昂奮できるのだと知つた悅びは、翌日冷靜になつた時、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com